
童話……なのか？

キッチンタイマー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

童話……なのか？

【Nコード】

N6245N

【作者名】

キツチンタイマー

【あらすじ】

ある日、公園のベンチに座っていると、五歳くらいの女の子が本を持って現れるどうやら、俺に本を読めということらしい

今日のご飯は何を食べようかなあ……そんなことを考えていた時だった。

五歳ぐらいの女の子がちょこちょこ寄ってきて俺のひざに本を置き隣に座った。

そしてじーっとこっちを見てくる、俺は膝に置かれた本を手に取り

「……これを読むの？」

一応言っておく、こんな子知らない、親戚にもこういう子が居た記憶が無い。

「シンデレラか、懐かしいな」

そしてページを開く

王子は王様が事あるごとに開く舞踏会に、いちいち参加するのが面倒でした。

[illegible]

「……何これ」

女の子の方を見るも、目をキラキラさせて続きを読めとアピールしてくる。

俺は、いちいち舞踏会に参加させられる王子のごとく面倒だったが

[illegible]

王様は厳しい人なのでなかなか言い出せません。

今日で最後だ、今日で最後だと思いながらもなかなか言い出せず時はどんどん流れていきます。

眺めるだけで踊らなくなっていました。

純白のドレスに身を包んだ美しい女性が目に飛び込んで来ました。

彼女と踊る時間はとても楽しく、とても優雅でした。

彼女は逃げるように去っていく、王子は呼びとめようとしませんが

しかし、いつになっても純白のドレスを身にまとった女性の行方はわかりませんでした。

見つかったのは階段に転がっていたガラスの靴だけ
ガラスの靴を持っているのだからどこかの国のお姫様がお忍びで来
たに違いない

そう考えた王子は家来に世界各国の城からガラスの靴を無くした姫
を探すよう命令しました。

しかし、いつまで待とうと見つかりません。

王子は世界各国に姫探しに放った家来に続けて、その国の靴屋にガ
ラスの靴の注文が無かったか

シラミ潰しに探させました、それでも全く見つかりません。

痺れを切らした王子はこっそりを城を抜け出し、あの女性を探すこ
とにしました。

ほかの国にいないとすれば自分の国のどこかに隠れているに違いな
いそう考えました。

さすがにそのままの格好では目立ちますから

王子は狩人に変装して城から少し離れた森へ行きました。

本当は湖のほとりに向かう予定だったのですが王子は、ほとんど城
の外に出たことはありません

なので、歩いているうちにいつの間にか森へとやってきてしまった
のです。

王子がうろうろと森の中を歩いていると、木で出来ている古ぼけ
た小屋を見つけました。

当てもなく森を歩いたので疲れた王子は、その小屋で一度休むこと
にしました。

そーっと扉を開けると、なんと狼がお腹を膨らませて寝ているでは
ありませんか

驚いた王子は、背負っていた銃を狼に向けながらゆっくり慎重に近
づく、何か声が聞こえてきます。

王子が耳をすますと、どうやら狼のお腹の中から女の子の声が聞こ
えてくるようです。

— — — — —
— — — — —
— — — — —

俺は再び読むのをやめた。

そして横で未だ目を輝かせている女の子に質問する

「……これ、ほんとにシンデレラ？」

「うん！」

清々しいくらいに即答だった

しかし、俺の知ってる限り狼のお腹から女の子の声って……

相変わらず続きを読め、と言わんばかりの目でこっちを見てくる。

仕方なく、俺は本を読み続けた。

— — — — —
— — — — —
— — — — —

王子は、狼のお腹の中に誰かいるようなので

銃を一度しまい、ナイフを取り出し狼のお腹をそーっとナイフで開くと

中から赤い頭巾をかぶった女の子とおばあさんが出てきました。

王子はひとしきりお礼を言われた後

狼のお腹に石を詰め、川に落つことすと狼はブクブクと沈みながら流れて行きました。

しかし、王子は昨夜の女性を見つけられず複雑な気分でした。

王子はサンドイッチを御馳走になった後

おばあさんと頭巾の女の子に見送られ森の奥へと歩いていきました。奥へ進むにつれ、だんだん寒くなります。

王子は鞆から黒いローブを取り出し、かぶりしました。

外からはただまっ黒いローブですが中は毛皮になっているので非常に暖かく快適でした。

さらに進むと、足に何かぶつかりました。

どうやら懐中時計のようです、見るからに安物で汚れては居るもののしつかりと時を刻んでいます。

王子はなんとなく時計の時刻を一時間進め、懐中時計を眺めると少し歩いたところに大きなリンゴの木が立っていました、おいしそうなリンゴがなっています

王子は懐中時計をその場に置き、そのリンゴを取りに行こうと歩きました。

すると、後ろから草の根をかき分ける音が聞こえたので

王子が振り返ると、そこには白いウサギが懐中時計を見つけ懐中時計のもとへやってきます。

ウサギは時計を手にとると同時に驚いた顔になり、大慌てでどこかへ去って行ってしまいました。

王子は、その光景にどこかほえましさを感じながら再びリンゴの木の方へ向きを変えリンゴの木に手を伸ばしました。

しかし、季節的にリンゴはあるはずがありませんし、このリンゴは紫色をしています。

そんなことも全く知らない王子は、リンゴを一つもぎ取り鞆の中へ入れました。

王子は、また小屋を見つけました、今度は先ほどより少し大きい小屋です。

今度は、狼がいなか窓から中をのぞきました。

すると、雪のように白い肌をした美しい女性が居ます。

どうやら昨日の女性ではありません。

王子は近くにガラスの靴を履いている人はいないか質問をしました、結局何もわかりませんでした。

さすがにこのまま立ち去るのも王子の品格にかかわります。

王子は先ほどのリンゴを渡して、その場を立ち去りました。

王子がもう少し歩いていると、遠くから数十人ほどが王子のことを

呼んでいます。

どうやら王子の家来のようです王子も大声を上げると家来数十人が一斉にこちらへ向かってきました家来は王子をぐるりと囲みナイフを向けました。

王子があわててローブを脱ぐと、家来は大慌てでナイフをおろします。

そんなこんなで、王子は半強制的に城へ帰り、次の日シンデレラが見つかって幸せに暮らしました。

おわり

[illegible]

俺は読み終わると完全に疲れ果て

「何だ、このカオスな物語は」

そんなことをつぶやいていると女の子は俺の手から本を奪い取り、どこかへ去って行った。

（後書き）

こんなくだらない作品を最後まで読んでいただき誠にありがとうございます

いろいろと文句を言いたい気持ちはわかりますが、いや、怒らないでください。

わかりました反省してますから、後悔はしてませんよ

あ、いえ！後悔しております！

なお、ここ直した方がいいということがあれば……感想をお願いいたします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6245n/>

童話……なのか？

2011年10月7日23時31分発行